

日本語における外来語のアクセントの 拍数別特徴

李 香 蘭

キーワード 平板型 特殊拍 アクセント核をずらす要因 複合語アクセント

要 旨 辞書の記載による外来語のアクセント型を拍数別に調査し、その特徴を明らかにした。2・3拍語では原則からはずれた例は少なく、頭高型が大部分をしめている。4拍以上の語には、－3拍目に特殊拍やアクセント核を前にずらす音韻的な要因が含まれている語が多いため、－4型や－5型が多く現れている。4拍語は、日常生活によく使われている語や縮約された形の語が多いため、平板型が目立つ。5拍語以上では、外国語の意識がはたらいで原語に多い第1音節にアクセントを置く傾向が見られる。複合語アクセントは、原則とほぼ一致しているが、後部要素が2拍語の場合は一定したアクセント型は見られない。

0. はじめに

拙稿(1992)で4・5拍語だけを対象として外来語アクセントの原則にはずれる語の分析を行ったが、それだけでは外来語アクセントの全体の特徴はわからない。そこで本稿ではNHK編『日本語発音アクセント辞典』(昭和60年版)に記載されている外来語アクセント型をすべて調査して、一般的に認められている外来語アクセントの規則と、共時的にみて実際にアクセント型がどうなっているのか、つまり拍数別アクセント型の特徴を明らかにする。そして、原則にはずれている語は、音韻的な要因や語の性質の面など様々な角度から分析してみる。さらに、最新版である『新明解国語辞典』(1991年版)のアクセント型をも用いて、アクセントの変化を調べた。(以下「アクセントの変化」とはこの二つの辞書の間での変化を意味する。)

1. 外来語アクセントの原則

外来語のアクセントはまったく任意というわけではなく、ある程度の規則性^{注1)}

が見られる。外来語のアクセントは、単純語と複合語で大きく区別される。

1) 単純語

(1) 2拍語と3拍語は原則として頭高型である。

(2) 4拍語以上の語は原則として、後ろから3拍目まで高い。^(注2)

(3) 古くから日本語に入っており、日常生活において頻繁に用いられる語は、平板型になる傾向がある。

(4) 新しく取り入れられた語で、外国語としての意識が残っている語は、原語のアクセントやそれに近いアクセントが使われる傾向がある。

2) 複合語

複合語については、後ろの構成要素のアクセント型によってその複合語全体のアクセントが決定される。詳しいことは複合語アクセントのところに記する。

2. 拍数別アクセント型の特徴

昭和60年版の『日本語発音アクセント辞典』に記載されている外来語(地名・人名を除く)の総数は、4002語で単純語3355語と複合語647語に分けられる。これらの語を対象として、拍数別内訳とアクセント型を〔表1〕と〔表2〕で見ることにする。

1) 拍数別所属語数の内訳

〔表1〕拍数別内訳(60年版) 下の()内は変化した語の総数。

	2拍	3拍	4拍	5拍	6拍	7拍	8拍	9拍	10拍	11拍	13拍
単純語 3355	135 (2)	773 (49)	1058 (108)	686 (70)	459 (32)	174 (2)	50 (2)	17 (1)	3 (0)	0 (0)	0 (0)
複合語 647	0 (0)	0 (0)	2 (0)	90 (2)	217 (8)	191 (3)	96 (2)	35 (1)	10 (0)	4 (0)	2 (0)
合 計 4002	135 (2)	773 (49)	1060 (108)	776 (72)	676 (40)	365 (5)	146 (4)	52 (2)	13 (0)	4 (0)	2 (0)

2) 単純語の拍数別アクセント型

外来語のアクセントには一般的に認められる原則が存在するが、実際にはすべての語がその原則にあてはまっているわけではない。そこで実際のアクセント型がどのようになっているかを60年版に記載されている外来語のアクセント型をすべて調査した。「アクセント辞典」のアクセント型の記述は1語について必ずしも一つに限られているということではなく、アクセントにゆれが見られる語については二つ以上のアクセント型を併記している。そこでここでは、アクセントのゆれのない語と二種類以上のアクセント型を持つ語に分類し、それぞれ拍数別に、同一のアクセント型に属する語を集めてその語数と割合を調べた。その結果を〔表2〕に示す。ここでは、平板型以外はアクセント型の位置を語末から逆に数える方法を取った。ゆれのある型はアクセント型は省略して、合計だけ記した。

〔表2〕拍数別アクセント型（複合語は含まない）

	ゆれのないアクセント型							ゆれのある型
	0	-2	-3	-4	-5	-6	合計	合 計
2拍	2	131	—	—	—	—	133	2
3拍	49	30	667	—	—	—	746	27
4拍	212	19	258	425	—	—	914	144
5拍	44	13	271	125	127	—	580	106
6拍	0	12	263	103	30	10	418	41
7拍	0	7	89	61	10	4	171	3
8拍	0	1	20	20	6	0	47	3
9拍	0	0	5	7	4	0	16	1
10拍	0	0	0	1	2	0	3	0
計	307	213	1573	742	179	14	3028	327

外来語アクセントの原則が存在しているが、〔表2〕に見られるように、実際には原則に一致している語とそうでない語とがある。ここでは、拍数別にアクセント型とそれに属する語を詳しく見ていき、原則に合わない語はどこにその理由があるのかを考えてみたい。この際、複合語は単純語とは別なアクセント規則があるので後で扱うことにする。最初に単純語を考察する。

(1) 2拍語

原則によると2拍語は頭高型になる。2拍語は、イブ、カー、ガス、キス、ギヤ、ゴム、ジャム、ドア、パス、ピン、ミス、ルビなど全部135例あった。その中で原則通りに頭高型^{注3)}(①)になっている語は131語(約97%)で、2例(ゲラ、ヒレ)は平板型に、1例(ストstrike)は頭高型と尾高型(①, ②)に、もう1例(ピケpique)は②, ①になっていた。「ゲラ、ヒレ」は原語galley, filetから縮約された形で、完全に日本語化されたため平板型になっていると思われる。「スト、ピケ」の②は母音の無声化の影響が考えられる。『新明解国語辞典』には「ピケ①, ②」, 「ヒレ②, 0, ①」^{注4)}に変化している。

なお付言すれば、「ゲラ」と同様に原語から縮約された形の外来語は、アマ(amateur)、コネ(connection)、ゴロ(grounder)、ネガ(negative)、レジ(cash register)など135例中41語あった。

(2) 3拍語

カット、シーツ、ソース、タオル、チャンス、テスト、パーマ、ピンチ、プール、ポスト、ミルク、メロン、モデル、ラベル、ロマン、ワイフ

(頭高型 計667例)

アルミ(aluminium)、ガラス〔オ〕、カレー、コップ〔オ〕、バケツ、ピアノ〔イ〕、ピント〔オ〕、ボール(ball, bowl)、ボタン〔ポ〕(平板型 計49例)
スカル②、スキー②、スコア②、スター②、グリル(grill①, ②)、トリル(trill②)、フリー(free②)、プレー(play②)、タブー(taboo②, ①)、ココア(cocoa①, ②)、デビュー(debut①, ②)、インク①, 0、パイプ0, ①

(その他57例)

3拍語も原則として頭高型である。3拍語は総数773例がある。この内、頭高型は667語(86.3%)があり、残り106例が原則からはずれたアクセント型をしている。この106例中49語が平板型になっているが、これらの例の大部分はオランダやポルトガル語から借用した語で、古くから日本語に入っており、日常生活によく使われてすっかり日本語になりきったようなものである。残りの例は「スカル②」のような「ス」の部分の母音の無声化によるものや「グリル①, ②」のように原語の語頭に子音連続を持っているものである。これは日本語の音韻

構造では語頭の子音連続は現れないため、この子音の間に母音を挿入して3拍語になった結果①になっていて、②は原語アクセントの影響（なごり）であると思われる。ところが「ココア、デビュー」の中高型（②）はどういう理由でこのようになっているのか不明である。しかし『東京語アクセント資料』によると、この2語とも19人中16人以上が①に発音している。また「デビュー」は『新^{注5)}』には①しか表記されていない。3拍語は全部で49語が変化しているが、ほとんど平板型と頭高型とのゆれのあるアクセント型への変化である。

（3）4拍語

アパート、サファイア、スポット、ドライブ、トロイカ、ナイーブ、フルーツ、ブレスト、マズルカ、モザイク、ユニーク、リポート、レシーブ
(-3型 計258例)

エッセー、ソックス、キャンパス、サンプル、オーダー、クーラー、バイヤー、ライナー、カクテル、ポスター
(-3拍目の特殊拍447例)

アイロン、アルバム、オルガン、インテリ(intelligentsiya)、カステラ、セコハン(second hand)、ダビングdubbing、ピストル、プラチナ
(平板型 計212例)

ギャラリー*、セミナー*、ビジネス*、シロフォン*、マガジン*、イニング*、メリット*、リミット*、コミカル*、ノミナル*
(アクセント核をずらす例)

パトカー、ヘアピン(0, -2)、ボンボン、ミニカー、ヨーヨー(-2型19例)
アマチュア(0, -3)、グラタン(0, -3)、サウンド(-4, 0)
(ゆれのある語144例)

4拍語以上では、平板型以外はアクセント型の位置を語末の拍から逆に数える方法を取った。4拍語の最も一般的なアクセント型、つまり-3型は4拍語の総数1058語中、258(約24%)しか見られなく、最も多いアクセント型は-4型で、この型は425例もあって4拍語全体の40%以上を占めている。これは-3拍目に特殊拍や多くの語にアクセント核をずらす要因が含まれていて、アクセント核が1拍前にずれて-3型から-4型になったことによる。アクセントにゆれのある語は4拍語で144例も見られたが、平板型と他の型とのゆれが多い。

4拍語の平板型は212語（4拍語全体の23.2%）もあり、これは平板型の総数308例の68.8%も占めている。上の例からもわかるように、平板型アクセントをもつものは3拍のところでも述べている通り「古くから日本語に入ったもので、日常生活によく使われているもの」が圧倒的に多いが、語形の面から見ると次のような傾向がある。

(1) 縮約された形が多い。4拍語で86例がこの形をしているが、この内54語が平板型になっている。「アフレコ、パソコン、マイコン、ラジカセ、リモコン」などの例がそうであるが、これらは「完全に日本語化された」という点からみて平板化されたとも考えられる。

(2) 語末が「ン」で終わる語は比較的平板型になりやすい。4拍語だけで48例も見られる。これに対して語末に「長音」や後ろから2拍目に「促音」を含んでいる語は平板型になりにくい。4拍語1058例中平板型が212語もあるにもかかわらず、語末に長音が入っている語206語中平板型（ゆれのある1語を除く）は1例も見られない。また後ろから2拍目に促音が入っている語は4・5拍語で174例があるが、この内平板型は1語も見つからない。

上の*印の例「イニング、ギャラリー、コミカル、ビジネス、マガジン、メリット」などは-3^{注6)}拍目に特殊拍がないのにもかかわらず、アクセント核が1拍前にずれた型、つまり-4型をしている。これは外来語アクセントの原則から完全にはずれたことになる。しかし、拙稿(1992)で「語末に「ー」「ン」「ス」「ル」や-2拍目に「ン」「促音」が来る場合にもアクセント核が前にずれる傾向がある」と指摘した通りに従来の外来語アクセントの原則では説明できない語でも、こういうアクセント核をずらす音韻的な要因を考慮すれば、ほとんどの語が説明がつくのである。

4拍語で変化のある語は比較的多くて108例も現れた。平板型への変化と60年版でゆれのある語の中で優勢なアクセント型への変化のパターンが全体的に多く見られる。

(4) 5拍語

アプローチ、インテリア、カフェテリア、コミュニスト、シャンデリア、ノイローゼ、パイオニア、ハイライト、ピアニスト、フラミンゴ、プログラム、ミスティク、ロマネスク、リアリズム
(-3型 計271例)

カレンダー, ステーション, デラックス, トロピカル, ナレーション

(-3拍目の特殊拍136例)

インシュリン, サッカリン, バイオリン, ハーモニカ (平板型 計44例)

アイボリー(-5), エッセンス(-5), クレジット(-4), セントラル(-5), デリカシー(-4), ハズバンド(-5), ボヘミアン(-4), ライセンス(-5)

(アクセント核をずらす例)

インパクトimpact(-5), エピソードepisode(-5, -3), カバレッジcoverage(-5), コンサートconcert(-5), パラグラフparagraph(-5)

(原語アクセントの影響の例)

イブニング, クッキング, ショッピング, チャーミング, ハプニング

(頭高型)

5拍語の単純語は全部686例ある。この内-3型は271例, 平板型44例があり, 残り265語は4拍語と同様に, -3拍目の特殊拍やアクセント核を前にずらす音韻的な要因を含んでいる語が多いため, -4型あるいは-5型またはゆれのある型になっているのである。5拍語で注目したいのは, 上例の中で原語が表記されている語のように原語アクセントの影響によるものや「シガレット」のように外国語の意識が強くはたらいで, 原語(英語)に多い第1音節のアクセントの影響を受けて頭高型となっている語があるということである。しかし, 原語アクセントと同様なものは, たまたま一致しただけで, 頭高型になる理由^{注7)}としても一つ考えられるのは, 4・5拍語にはアクセント核をずらす要因が含まれていて, -3型から頭高型になる語が多いことである。

また, 原語に-ingを持つ5拍語は平板型か頭高型が多い。50例中平板型が21例, 頭高型が20例も見られる。

変化した語は44例(5拍語全体の6.4%)があるが, 頭高型への変化が目立つ。

(5) 6拍語以上

アクセサリー?(-6, -4), アニメーション(-4), エスカレート(-3), ガムフラージュ(-4), グライNDER(0/新0, -5), スーパーマン(-4), ダイナマイト(-3), ディスカウント*(-4), ボキャブラリーvocabulary(-5)

(6拍語 計459例)

インフルエンザ(-3), キャッチフレーズ(-3), コーディネーター(-4), トランジスター(-4), プロテスタント*(-5), ロマンチズム(-3)

(7拍語 計174例)

オリエンテーション(-4), ニトログリセリン(-3, 0/新0, -3), プロレタリアート(-3), スプリングボード#(-3), ユニバーシアード(-3)

(8拍語 計50例)

スーパーマーケット*(-5), スポーツマンシップ(-3) (9拍語 計17例)

トランスフォーメーション(-4), バイオインダストリー*(-5)

(10拍語 計3例)

6拍語以上は4・5拍語に比べると、ゆれのある例が少なく原則からはずれたものも目立たない。また平板型もゆれのある語(7例)を除けば6拍語だけに3例しか見られない。これは拍数の長い語が多いため、-3拍目か-4拍目にアクセント核を置く傾向が強いからである。また#印の語のように複合語的なアクセント型と一致しているものが6拍以上の語では多く見られる。また、ここでも*印の語のようにアクセント核を前にずらす要因が入っている例が多く現れていて、アクセント核が前にずれた型をしているものは6拍語で55例、7拍以上の語で25例がある。拍数が長いため、アクセント変化も少なく、6拍語で32例、7拍以上の語で全部5例しか見られない。

3) 複合語のアクセント

(1) 複合語の判定方法

「複合語であるか、複合語でないかの客観的な判定は、外来語の場合は、特に困難な点がある。言語のスペリングが切れているか切れていないかという判定方法もあるが、日本で使っている外来語は、外国語の単語を二つ勝手につなぎ合わせた和製外来複合語も多く、原語の表記法を調べても無意味な場合がある。^(注8)」という見解がある通り、外来語において複合語かそうでないかを判定するのは非常に困難である。複合語と思われる語のそれぞれの構成要素が単独の語として用いられるかどうかという基準を立てることもできるが、構成要素に分解するには、原語の外来語の知識が前提となり個人差が大きいと考えられる。ある語についてそれを複合語として捉えているか否かは話者の主観に依存する部分が大きいのである。そこで、ここでは、原語において二つ以上の単語に分

けることができる外来語について、5人の日本人にそれを複合語と意識しているかどうかについて質問し、3人以上が複合語と判断した語を複合語と定義した。さらにいわゆる和製外来語も複合語に含めた。

(2) 複合語の拍数別アクセント型

(1)で述べた基準によると、60年版に載っている外来語の複合語は647語である。外来語アクセントの原則によると、複合語のアクセントは後ろの構成要素のアクセント型によって決定される。つまり、後部要素が平板型の場合は後部要素の1拍目までが高くなり、後部要素が起伏型の場合は後部要素のアクセント核までが高くなる。まず、複合語のアクセントが実際にどのようなになっているのかを見てみよう。

[1] 後部要素が平板型の場合

カフスボタン、キャッチボール、グランドピアノ、スペシャルイベント、
チャームポイント、ドライカレー、パイプオルガン、パラボラアンテナ

(計48例)

これらの48例中「フルスピード④、ホームグラウンド⑤、ホームプレート⑤」以外の語(45例)は全部原則通りに、後部要素の1拍目まで高くなっている。

[2] 後部要素が起伏型の場合

i) 後部要素のアクセント型が①型(頭高型)の場合

ガスタンク、カセットテープ、グランドオペラ、コンタクトレンズ、ショートパンツ、テニスコート、バスガイド、ヒットソング、ビニールハウス

(計477例)

これらの語は例外なしで全部後ろの要素の1拍目までが高くなっている。しかし、この場合は後部要素が平板型の場合と区別がつかなくなる。

ii) 後部要素のアクセント型が①型(中高型)の場合

アンダースロー、コバルトブルー、タイムマシン、チームプレー

(計78例)

この78例も全部後ろのアクセント核までが高くなっている。

iii) 後部要素のアクセント型が③や④の場合も16例あるが、すべて後ろの要素のアクセント核まで高くなっている。

以上、複合語について見てきたが、単純語とは異なってアクセント型は後部要素のアクセント型によって機械的に決まり、しかも例外が比較的少ないとい

うことがわかった。しかし、後部要素が2拍語の場合はかなり不規則的である。例として「オープンカー③、ケーブルカー④、⑤、スクールバス⑤、ナイトショー③、ネクタイピン③、バラエティーショー⑥、プッシュホン③」などが挙げられるが、こいいう後部要素が2拍のものは一定な決まりがなく、後ろの要素の1拍目まで高くなったり、前部要素の最後の拍まで高くなっている例も見られる。複合語647例中変化のあるものは16例しか見られない。この16語もほとんど後部要素が2拍語の場合である。

外来語複合語の後部要素の拍数と拍数別アクセント型をそれぞれ[表3]と[表4]にかかげておく。

〔表3〕複合語における拍数別後部要素の拍数

	1拍	2拍	3拍	4拍	5拍	6拍	7拍	合計
4拍	0	2	0	—	—	—	—	2
5拍	0	27	63	0	—	—	—	90
6拍	0	28	166	24	0	—	—	217
7拍	0	7	116	61	7	0	—	191
8拍	0	3	36	31	24	1	0	96
9拍	0	0	7	10	9	8	1	35
10拍	0	0	1	2	2	4	1	10
11拍	0	0	2	1	0	1	0	4
13拍	0	0	0	0	2	0	0	2
合計	0	67	391	129	44	14	2	647

〔表4〕後部要素の拍数別アクセント型

		4拍	5拍	6拍	7拍	8拍	9拍	10拍	11拍	13拍	合計
平板型		0	0	19	18	9	1	0	1	0	48
起伏型	①	2	81	177	136	61	14	3	2	1	477
	②	0	4	17	26	14	12	4	0	1	78
	③	0	0	0	0	7	5	0	0	0	12
	④	—	0	0	0	0	1	2	1	0	4
○注9)		0	5	4	11	5	2	1	0	0	28
合 計		2	90	217	191	96	35	10	4	2	647

3. 結論と課題

以上、外来語のアクセント型を拍数別に分けて見てきたが、その特徴を次のようにまとめることができる。

2・3拍語では原則からはずれた例はそれほどなく、頭高型が大部分をしめている。4拍以上の語には、－3拍目に特殊拍やアクセント核を前にずらす音韻的な要因が含まれている語が多いため、－4型や－5型が多く現れている。また4拍語は、古くから日本語に入っており、日常生活によく使われている語や縮約された形の語が多いため、平板型が比較的多い。5拍語以上では「シガレット①, ③, アクセサリー①, ③」のように、外国語だという意識が強くはたらいて原語（英語）に多い第1音節にアクセントを置く傾向が見られる。拍数が多い語ほど原則に一致している割合が高くて、アクセントの変化もあまり見られない。

複合語アクセントは原則とほぼ一致しているが、後部要素が2拍語の場合は一定したアクセント型は見られない。

今後残された課題はこの複合語アクセントの問題である。複合語アクセントは後部要素のアクセント型によって決定されるのであるが、その後部要素のアクセント型が変化した場合に、複合語全体のアクセント型はどうなるのか——同時に変化するのか、送れて変化するのか、あるいは全く変わらないのか——ということと、複合語の後部要素として使われるようになったために、その語が単純語として用いられる際に、複合語の後部要素としてのアクセント型が影響を及ぼすことがないのかということについて、用例を多く集めて調べる必要があると思われる。

<注>

- 1) 『日本語発音アクセント辞典』（昭和60年版）所収の、秋永一枝「共通語のアクセント」pp.82-83参照
- 2) しかし、4拍以上の語については、後ろから3拍目に発音・促音・長音・二重母音の後部要素が来る場合には、アクセント核の位置は原則として1拍前にずれる。
更に、後ろから3拍目に無声化した母音が来る場合にもアクセント核は1拍前後にずれる。
- 3) 2拍・3拍語ではアクセント型の位置を語頭から数える方法を取った。
- 4) 0は平板型を示す（以下同じ）

- 5) 『新明解国語辞典』(1991)を省略
- 6) 後ろから3拍目のこと(以下同じ)
- 7) 篠原(1984)は、頭高アクセントになる語について、音韻的な要因・原語アクセントとの関係・「外国語らしく聞こえる、という心理的要因」を検討し、どれも決定的な要因とはなり得ない、と考えている。
- 8) 菅野(1970), p7s参照。
- 9) ○印はここでは、アクセント型の表記がない語とゆれのある語を示す。

＜参考資料＞

- NHK編『日本語発音アクセント辞典』昭和60年版
- 金田一京助他編『新明解国語辞典』〔第4版〕1991, 三省堂(用例中「新」と略)
- 石綿敏雄『基本外来語辞典』1991, 東京堂
- 馬瀬良雄・佐藤亮一『東京語アクセント資料』1985, 科研費資料集
- 井上史雄「業界用語のアクセント」(『言語』1992, 2)
- 梅垣 実『日本外来語の研究』昭和38年, 研究社
- 菅野 謙「外来語のアクセント」(『文研月報』1970)
- 篠原朋子「変わりつつある共通語アクセント(2) オーディオは平らにサスペンスは前へ」(『NHK放送研究と調査』1984, 2)
- 最上勝也「平らになる外来語アクセント」(『放送研究と調査』37, 1987)
- 李 香蘭「日本語(共通語)における外来語のアクセント変化について」(『文化』第54巻第3・4号1991, 東北大学文学会)
- 「外来語アクセントの原則にはずれる語の分析—音韻的な要因を中心に—」(『言語学論集』第1号1992, 東北大学言語学研究会)